

## 脂っこい話

脂っこい話になる。

高体連支部大会の登録人数は7人。それにマネージャー枠が1人である。途中でチーム内の実力順位が変わっても、全道大会までこの登録順位は入れ替えることが出来ない。だから、仮に全道大会の出場権を得て、旭川に遠征する場合でも、チームに帯同できるのは最大で8人ということになる。

マネージャー枠については、テニスの実力順位とは無関係に選ぼうと思う。また、団体登録7人のうち、実際に団体戦で試合をするのは4人だけ。残り3人は補欠である。団体戦の登録順位は悩みの種。特に、今年のように登録枠のボーダーライン上で実力が伯仲する時は頭が痛い。しかし、ホンネはこうやって代表枠を競い合う状況は嬉しい限り。もっとももっと伯仲して、その中から突き抜ける者が出てきてほしいものだ。(余談であるが、強いチームには、この“突き抜ける者”がしばしば現れて大会で大活躍する。それはチーム内の力が伯仲し、競い合う状況があればこそその産物である)

団体戦のシングルス2人とダブルスの2人は、よほどのことがない限り固定したメンバーで臨むつもりである。団体登録の1番から4番までで試合を行うとして、残る5番6番7番登録の選手とマネージャー枠をどうするかが問題である。選手がケガをしたり、体調を崩して試合が出来なくなれば出番も回ってくるけれど、順当に行けば5～7番は団体戦には出ない。試合をしないのなら、補欠とマネージャーには誰がなってもいいわけだ。

大前提は校内でのシングルスの実力順位である。秋と同様に試合を行って決めなければならないが、例えばタイブレークとか7-5、6-4になるような試合では、その結果だけで序列は決められない。まして、補欠が繰り上がって試合をするのはダブルスの試合になるわけだから、シングルスの結果だけで判断することはできない。

というわけで、今から言うておくことにする。選手、特に補欠とマネージャーは、信頼できる部員を選ぶ。それは普段からさまざまな意味でチームに貢献している部員である。

では、“信頼できる部員”とは何だろう。そして“チームに貢献する部員”とは。それは“テニスがちょっとだけ上手なヤツ”では断じてない。“楽しくやりたいヤツ”でもなければ“自分が勝ちたいヤツ”でもない。チームの思いとベンチの意図を理解し、それをプレーや態度で表すことのできる部員である。チームを代表して戦い、仮に負けても、私やみんなが納得できる部員である。ひたむきに練習し、声を出してチームを盛り上げ、ルールとマナーをわきまえ、率先してボールを拾い、道具を運び、立派に挨拶し、誰からも好感を持たれ、私やみんなが岩見沢東高校のテニス部員として誇りにできる部員である。